

子一萬箱王の証付けし場に來合せ、節重の代りに一萬箱王を討取らんとして戦へるを、文量上人に諭されて相和し主従の約を結ぶ。後にも名取友切丸を携へて文量の庵室を訪ふ途中、股野五郎景久に要撃せられ、奮闘して景久を殺す(本領曾我)。

曾我祐成時致兄弟の下人なり。源頼朝に遇ひて曾我兄弟が親の管工藤祐経を殺さんとて肝膽を砕ける由を哀訴し、範頼より頼朝の前まで行き得る御符二枚を借りて之を曾我兄弟に渡す(曾我會務山)。

おほほろすのわらじ

大碓王子。景行天皇第一皇子なり。王位を奪はんとして筑紫の咒賊八十島師と通じ悪行多かりしかば、景行天皇の逆鱗に觸れて斬罪に處せられんとせられしを、吉備武彦哀訴して王子の悪心を矯正せんとし、ついでに死を以てせんとするに及んで王子深く武彦の心に感じ、非行を悔悟して两眼を採り、これより善人となり、武彦の子の田鶴若の死骸を抱きて天皇に謁し給ふ(日本武尊吾妻鑑)。

おほうなばらわろじ

大海原王子。嵯峨天皇の従弟なり。生年二十三。悪右馬尉仲成と謀りて逆逆を企て空海に看破せらる。また悪僧守敏と共に北岩倉の深山に籠りて大威徳の法を修し、天下を覆さんとして大炊介仲經に追捕はる。後遂に天皇を嵯峨の離宮に幽閉し攀らせ、自ら僧して帝と稱し淫逸驕奢に耽りしが、靈の大部を攻めて利あらず。弘法大師の尊修法の際、嵯峨天皇に飛掛らんとして播磨藤大炊介仲經の兩人に刺殺せらる(嵯峨天皇甘露雨)。

おほくさかのしん

大草香臣。中野山に籠居し、名を扇庵と改めて安康天皇及び中野姫を咒咀、以て天皇を簪になし姫の機疋を封せしが、園大臣の重臣諸宗に刺殺せらる。然るにその魂魄中野姫の胎内に入り、袋子となつて出葛城川に棄てらる。是に於て袋子鬼子となつて眉輪王と名乗り、熊と格闘して之を斃し、直に安康天皇に飛掛つて弑し奉りしが、雄略天皇の爲に退治せらる(浦島年代記)。

おほたかまる

大高丸。勢州鈴鹿山の悪鬼を従へ、變身の術に長ぜしが、遂に坂上田村麿に退治せらる(田村將軍初觀音)。

おほとらぬい

大藤内。備前國吉備津官の禰宜なり。建久四年五月二十八日の夜工藤頼經の假寐にて酒宴し寢に就きしが、其夜曾我三子に斬殺せらる(加増曾我)。

おほひのすけ

大炊之介。伊駒姫の伯父なり。惟喬親王の叛逆に一味し親王の命を奉じて歸せし、伊駒姫が在江中將兼平と歌の贈答せるを見て怒り、伊駒姫を虐待し兼平を欺いて清和天皇を奪ひしが、兼平の郎尊般若五郎仲則の爲に取返さる。また兼平を殺さんとして伊駒の家を襲撃し、其門前に立てる伊駒姫を兼平と見誤つて斬殺せしが、怒り伊駒姫の怨靈の爲に井戸に投込まれて死す(井筒兼平河内通)。

おほやまつみ

大山祇。木花開耶姫の父なり。素戔嗚尊より木花開耶姫を所奪せられたるもこれを還還梓尊に奉る。後に素戔嗚尊を出雲國縁の川上の長手摩乳の家に訪ひ、手摩乳の娘稻田姫を大山祇の養女として

素戔嗚尊に奉る(日本振袖始)

おほよど 大淀。京都九條町の遊女なり。足利義輝に落籍せられ、三好長慶の養女として義輝の御所に入る。これより義輝益淫逸に耽り憂ふ行多し。然も大淀これを諫むこと能はず。淺川左京大夫藤孝を呼ばれ、己が心底を語らんと断られ、心中を打明けて斃る(津國女夫池)。

おぼろづき

朧月。吉備武彦の妻なり。夫と共に大碓王子の悪心を矯正せんとせしが、王子更に改心し給はざるにや、夫妻死を以て謀めんとして自刃せんとせり、夫妻死の運に制止せらる(日本武尊吾妻鑑)。

おもだかひめ

澤瀉姫。故三位伶人富士丸の娘なり。父の死後伯父太見縣主時景に養はる。時景、姫の所持せる天鼓といふ鼓を奪はんと欲し、姫を贈して巴九と共に狐釣に出でしむ。時に能勢稻荷の千年狐現はれて時景の悪心を知らず。是時景主従公卿に智略之介、天鼓を奪はんと欲し、澤瀉姫はこれより舟渡に下り、能勢稻荷社の官司松垣藏人興宗を便り、興宗の奸策にかかりて天鼓を奪はれんとせしが山路判官柳豐に救はれ、愛人吳服中將雪枝を奪れに陸奥局の閑居を訪ひ、案内を乞うて陸奥局に陸奥局に拒絶せられ、憤怒の餘り悶絶して治太郎に害せられんとせしを雪枝の家人金目丸に救はる。後に時景も宇治太郎も滅び、姫は雪枝と共に播磨の小次郎狐に誘引せられて齋親王に謁し眞賞を賜はる(天鼓)。

かくはん

横川覺範。大和吉野山の僧な

に奥州・今川の二傾城が権水文彦に意氣増を磨くを海瑠璃に改作したるなり)。

おもだかひめ 澤瀉姫。岩倉大納言兼多卿の女にして、源頼光と婚約あり。然るに頼光は清原右大将高藤に讓せられて行方不明となるや、姫辭職して暮す。或日煙草賣の源七を呼入れ、三味線を奏かしてて武功を慰む。後に源光高懸山の鬼神を退治して武功を立てるや、澤瀉姫四位に叙せられ、勅命ありて頼光と結婚の日を定めらる(娘山姥)。

かいそん

常陸坊海尊。仙人となつて奥州高館に行き、武藏坊辨慶に逢うて海瑠璃姫の最期及び姫が女瑠璃に生れたる桃源延命酒・銀の心葉・黄金の盃・瑠璃の盃を渡し、風に乗じて去る(源義經將基鑑)。

がうざゑもん

坂部郷左衛門。澧州濱松の城主淺山氏に仕へて弓頭を勤む。或日城主鷹野の歸途を招待して齋籠す(胥庚甲)。

がうたつ

剛健。建親王の臣なり。海道の港にて吳三桂の妻柳歌君と戦うて殺さる(國性爺合戦)。

からまん

赤沼前司入道幸滿。足利義教の逆臣なり。節分の夜義教を殺して其印判を奪ひ、また密偵新波義將を罪に陥れん爲に、一色大炊介に命じて義將の家來藤内太郎の携へたる笛を義教の名笛小水龍と誤信してこれを折らしめ、また藤内太郎の妻中川を欺きて義教の太刀を盗ましめ、遂に反して兵を擧げしが、新波義將等と戦ひ敗れて逃す(雲女五枚羽子板)。

り。源九郎義經が吉野の奥に遁れ入りたるを討取らんとし、川倉法連等と共に之を攻めしが、義經の家士佐藤忠信の爲に殺さる(吉野忠信)

かげきよ 悪七兵衛景清。平家滅亡後

頼朝を祖はんとし、南都東大寺建立の人夫に扮して紛入りて、山山重忠を祖ひ、頼朝に捕手を繋向けらる。景清これと戦ひ遁れて京都に上り、清水坂に妾の阿古屋を訪うて清水親吉に詣づ。阿古屋は景清が熱田大宮司の娘小野姫と情交密なるを嫉妬の餘り、兄十藏をして景清の居所を訴人せしめし爲、江間義時部下を率ゐて清水寺を圍む。景清妻を投げ置殺して東路に遁る。梶原景季父子乃ち熱田大宮司を獄に投じ、小野姫を惨酷なる拷問にか。

景清出でて自ら縛に就く。阿古屋は兄をして景清を訴人せしめたるを悔ひ、景清の獄前に來つて罪を論じ、二子を刺殺して自刃す。頼朝、佐佐木四郎に命じて景清を三條殿に斬らしむ。是時勿體なくも清水親吉景清の御身代りに立ち給ふ。頼朝爲に景清の罪を赦して日向國宮崎庄に封ず。景清も頼朝を祖ふことを断念し、不具者となつて親善經を誹謗して世を終ふ(出世景清)(序云、出世景清は義太夫の爲に新淨瑠璃を作る始にて、出世と冠したるも義太夫の縁起を祝したるなり)

かげすゑ 梶原景季。源頼朝より山山重

忠と共に義經辨慶等の首領檢を仰付けらる。重忠が鄭重に義經等の首を取扱ふを難じ、義經の首の贖物なるを始めて重忠と口論し、ま大朝前を諷に投ぜんとして本田次郎近經に妨げらる。後、頼朝の命を奉じて諸國の名馬

を集め、御狩馬揃ありし時、景季の部下番藤の忠木國久が曾我兄弟小柴藤部勝重に殺害せらる。景季、敵より呼掛けられ九れど恐れて遁去る(大磯虎補禮記)

かげとま 梶原平三景時。源頼朝の寵

臣なり。頼朝近習の者を集めて夢を割せしめし際、山山重忠と夢論をなして負く。後、頼朝の代官として奥州征伐の將士の武功を聴取し、葛西郡司清重の武功なきを始めて自殺せしめ、清重が頼朝より授けられたる金の采配(曾我鶴山)

景季、源頼朝の命を奉じ義經討伐の爲京六波羅に着し、鞍馬山の東光坊を召して頼を隠蔽せらるを訊問し、却つて東光坊に罵らる。後、梶原野の奥に祇王の庵室を襲ひ、喜三太と戦つて頼を奪去り、鎌倉に赴く途中大津の逆旅にて、頼の分焼したる男子を殺さんとしそを身代と知らず大津二郎の子を殺し、頼を二郎に預けて鎌倉に下る。後、美濃國青野が原にて喜三太と格闘し、搦められて奥州に引かれ、義經の前にて大津二郎に殺さる(藤頼胎内損)

かげたか 梶原景高。梶原平三景時の次

男なり。名馬磨錘の足を洗へる際、鶴若に邂逅して罵られたる上にその馬を奪去らる(源義經將妻經)

を取上げたり(傾城島原駐合戦) 梶原平三景時の次男なり。源頼朝の命を奉じ北條時政と共に三萬騎を引率し、京都堀川なる義經の討手に向ひしが、武藏坊辨慶の爲に開の戸を破られ、義經を討取らんとし、義經の家士佐藤忠信の爲に殺さる(吉野忠信)

かげはや 勘解由兵衛景逸。吉田少將

藤原朝臣行房の逆臣なり。悪漢常陸大掾百連と相謀り、比良嶽の老樹を伐り、比良山の天狗をして行房の家に来らしめ、尋で百連と謀つて行房を殺せしが、行房の奴車介の爲に池に投込まれて溺死す(雙生隅田川)

景高常に工藤經親に一味し、源頼朝が鎌倉御所に應請を取掛り席上、範頼に迫つて狩場の御符を二見せんと請ひ、それは曾我(二子)に與へし爲に之を無きを知るや、これを詰りて自害せしむ。又二宮太郎安清が富士裾野へ注進の早打の命を蒙るや、景高これを詭経の爲に不利なりと思ひ、安清を藤原に要難したり(曾我鶴山)

かげひさ 股野五郎景久。伊東次郎祐

近の子、祐清の弟なり。亡兄祐重追善の席にて頼朝の臣藤九郎盛長と角力して死を負ふ。頼朝主従を遂に要難せんとし、祐清に妨げらる。後、頼朝に攻められて真田與市義定に殺さる(頼朝伊豆日記)

景久性剛勇にして平家盛徳の嬖妾兼野に戀想し、匪妻女に媚はるや頼朝へ、兼野は景久を殺つてその心に從はず。後、景久友切丸の名劍を奪はんとし、兼野の隙を祖ひ、みさきの前を襲うて朝比奈義秀に追拂はる。鬼王、三郎が友切丸を携へて文登法師の庵室を訪へるを遂に要難して殺さる(本領曾我)

かげひさ 足立右馬允景久。源頼朝より浪人吟味役を命ぜられ、鶴岡八幡宮に詣

て婚約せらる葛西郡司清重の娘野懸姫と逢ふ。この時清重奥州征伐の軍に従ひて武功なきを恨原景時に誹られて自殺したるを聞き、景久乃ち葛西家と絶つて我が家の名折らんとし、義經と縁を絶つ。景久京都に上り禁中に警固して幕合戦を目撃す。折しも吉田中納言經房卿、景久を召して浪人吟味の怠慢を責む。景久乃ち七草四郎の情婦の父手塚繼樂を召喚して四郎の行方を訊問し、四郎を肥前國七草城に攻めて武功を立て、山山重忠の媒酌にて琵琶姫と婚す(傾城島原駐合戦)

かげむね 長田前庄景宗。尾張國內海の長田庄司景宗の子なり。父と謀り源義朝を殺して平家の恩賞に預らんとし、義朝を瀆す茶屋なる華湯に溺きて、之を殺さんとせしが(鎌西八郎爲朝に殺さる(鎌田兵衛名所志))

かげむら 笠見藏人景岡。藤原時平の

執權なり。菅丞相の罷問し、大物浦より船に乗せて途中に失はんとし、弓矢を手袂み後を追ふ。この時十六夜が普公を助けんとし、七首を衝へ泳ぎ行くを見て之を射殺せしが、己は寒簀竹に殺さる(天神記)

かすて 鞍作敷手。大連物部守屋の反逆

に祖し、守屋が立花の會を催したる日に膳親

責に殺さる(聖徳太子繪傳記)  
かち 河内屋與兵衛の異兄妹なり。兄與兵衛の暴怒放逸を矯正せんとて兄の意に従ひ、病と稱して父母を欺く(女殺油地獄)

かつ 阿勝。武田博玄の重臣山本勘介晴幸の妻なり。老母に従ひて長尾輝虎の重臣直江山城守實綱の所に至る。阿勝吃にして言語自由ならず、筆にて書き或は筆を擲じて其意を述ぶ。折しも勘介、阿勝の筆跡になる老母大病との書面を得て尋ね来る。然るに阿勝はかかる書面を書かず、實綱の妻居衣が偽筆して勸助を長尾家に招かんとする苦計なるを恨み、阿勝・唐衣互に抜合ひしが、老母・兩女の間に入り、移理を立てて死す(信州川中島合戦)

かつらみ 眞砂前司勝海。播州の武士桃園染五郎曹舟の家臣にして、八十八の老齡なり。土師別當村正・村任の兄弟が曹舟の室二位の姫を脅せる場に来つて、姫の危急を救ひて敵手に斃れしが、姫より西王母の桃を吹込まれて蘇生し二十餘歳の若侍となる。かくて姫の侍女小萩と夫婦となり、主君の行方を探ねて大和路なる那山の彌羅昇となる。一日室津の遊女屋長と云ふ者來つて遊女を彌羅に乘せよといふ。勝海通行人を呼んで彌羅の相方を頼むが、その人は我主君の曹舟なるに驚く。是時鬼女薄雲が妹の二位の姫を追捕して來り、彌羅なる遊女及び二位の姫を殺す。曹舟・勝海乃ち薄雲と戦つて之を殺す。長は遊女の殺されたる代價を勝海に迫り、勝海致方なく小萩を代價に渡す。後、小萩を慕つて室津に行けば、主君曹舟の官城野(小萩の地名)に懸想する體を見、主君の俯甲斐なきを歎きて毆打す。是時村正等が官城野を請ひま

んとして來るに會して村正を殺し、後また醍醐の旅舎にて勝海・勝興の父子協力して村正を殺し、主君曹舟と奈良興禪寺南大門にて相會す(日本西王母)

かつらみ 弓削勝海。大連物部守屋の副將なり。葛木島主等に攻寄せられ、跡見赤袴に破られて身を以て免る(聖徳太子繪傳記)

かつおき 眞砂乙太郎勝興。眞砂前司勝海の子なり。好色の爲勸當されて辻能帥となり、市中にて辻能をなせる際二位の姫が官太村任に追はれて來るを通れしめ、能狂言に紛らして村任の妨をなし、之を捕へて葛籠の中に押籠め、村任の下人唐村兵太に撥はしめて追捕ふ。後、醍醐の旅舎にて父勝海に邂逅し、父子協力して村任を殺し、父と共に奈良興禪寺南大門に来つて主君の桃園染五郎曹舟に逢ふ(日本西王母)

かつしげ 小柴掃部勝重。三島村小柴郡司の子なり。中納言實基卿に奉公せる際、父郡司が番場の京太國入に殺されたるを聞き、主家が囁を告げて我家に歸り、大隈遊郎に妹虎を尋ね、相付け邸を遣出で途中に曾我祐成に逢ひ、三人共に箱根の寺に五郎時宗を訪ふ。後、頼朝が御狩場揃の場に赴き、土民に扮して國入に近付き、遂に之を殺して亡父の仇を報す(大隈虎推物語)

かつしらう 江戸屋勝二郎。八幡の富豪なりしが、新町次木屋の遊女吾妻に關染みて妾著を極め、親手代惣七を信任、吾妻を誦出すことより滅亡の禍機をなして官より追放せらる。乃ち吾妻と共に奈良に落ち鷹目を見しめ、遂に舊手代新七夫妻等の忠義によつて救はれ再び家を興すに至る(淀輝出世繪傳)

(序云、大阪北濱屋長五郎開所事件の脚色)  
かつとら 布引左馬頭勝虎。布引先生勝成の長男にして淀次郎照房の兄なり。持統天皇を幽閉し奉れる平倉の番を勤めしが、春彦尊より尊の弟夏仁親王を尋出して弑すべしとの命を受く。是に於て勝虎は持統天皇、夏仁親王を助けまらせ、春彦尊を討九んと決し、照房と謀つて合はす互に口論して父より御供を受く。勝虎の妻淺衣が天皇の御供して行方不明となる。勝虎乃ち天皇の行方を尋ね、飛鳥の里にて天皇及び淺衣に出合ふ。是時尊の部下藤原親官軍則攻寄す。即ち戦つて之を斬り、尊と春彦尊を滅す(持統天皇)

かつなり 布引先生勝成。津の國蘆屋の郡主なり。春彦尊より召されて奉し、其歸途橋立左衛門秋廣に逢ひて尊の逆心あるを語る。勝成の二子勝房・照房、尊より夏仁親王を尋出して弑すべきを命ぜられ、二子の意見に一致せず互に口論したるを勝成聞いて尊を討受けん爲殊更に二子を勸當したり。偶勝成の尊より驍勇の會に召さる。勝成決行の志を堅うし、裝束を改め驍勇の懸に出でて尊を狙ひしが、尊に覺られて首を刎れらる。後、勝成の魂魄尊の乗れる馬の手綱を執つて動かせず、以て尊を滅すに至る(持統天皇歌軍法)

かつひて 細川右馬丞勝秀。足利將軍義教の命によつて斯波左衛門義隆の討手に向ひしが、義隆の心事を聞いて深く感じ相和して別る。後、赤沼幸滿旗幟を擧ぐるに及び、乃ち義隆と共に赤沼父子を攻めて之を誅す(聖安五枚羽子板)

かつひら 津川三郎勝平。奥州の浪人なり。源九郎義經の行列に對して禮せず、辨慶その無禮を咎む。義經は津川三郎なるを知つて之を臣とせんとす。勝平これを辭して出羽國佐藤庄司の子繼信・忠信を推薦す。後、妹早姫と共に繼信を尋ねて扇島に行き、繼信討死せし由を聞いて慙歎せる折しも、かねて繼信と不和なりし安西重正太郎氏重に攻寄せらる。勝平乃ち氏重を殺す。新黒谷に行きて法然上人を頼んで繼信の追善を誓ひ、法然上人の佛の不思議を見せ給へるに感じ、一念發起極樂に往生せんとして切腹す。其腹中より善照二つの玉飛出でて互に勝平の屍を誘ひしが、善の玉遂に惡の玉に勝つて勝平極樂に往生す(津川三郎)

かつぶさ 大道寺新兵衛勝房。今川伊豫守源貞世入道了俊の家老なり。了俊の長子仲秋に陪して西京に在りしが、了俊病革るや仲秋に隨つて歸國す。了俊の死後了俊の弟の眞廣に大敵を迫られて不同意を唱へ、これを罵つて歸る途に相殺荒川藏人近年に出合ひ、眞廣の反心あるを語る。青砥五郎勝次が眞廣に欺かれて自分等を召捕へんとして來るに逢ひ、即ち實を告ぐ。勝次是とは悟り亦面せる折しも眞廣反旗を擧げたりとの報あり。乃ち三人相和して、勝房は國中に忍び敵情を窺ふ。或夜大隈小磯の境なる松原の辻にて二人互に斬詰るを見咎め、之を避避して荒川近年と青砥勝次なるを知り、互に誹誚したるを喜び合ひ、俱に共に主君を尋ねて三河に行き、結城右衛門木太種春の義軍に會し、大擧して眞廣の居城駿府を攻め、敵將梶原民部を斬り眞廣を生捕す(今川了俊)

かつぶぢ 橋判官勝藤。前判官價領の



かねやす

妹尾太郎兼康。平家の家士

なり。平清盛の命を奉じ、鬼界島の流人成經、藤原朝臣の使者となつて行かんとする途に能登守教經に出合ひ、俊寛をも召還すべしと諭されて之を拒みしが、教經より俊寛朝臣の自筆状を得て漸く其命に従ひ、鬼界島に到つて三人を連れ歸らんとす。成經の情婦千鳥乗船を懇請して許されず。是に於て俊寛の代りに千鳥の乗船を請へど、兼康これをも拒む。俊寛乃ち兼康に近寄り、俄に腰刀を奪ひて兼康を刺す。兼康痛手を負ひながら俊寛と格闘して斃る(平家女護島)

かはかつ

秦川勝。父死して家中にありしが、親友葛木島主より聖徳太子の軍に屬するやう懇望されたれど、物部守屋に義を立てて肯ぜず、亡父の位牌を二つに割り其一片を渡して、此位牌を接合する時來らは、我孝も或も立つべきを約す。かくて守屋の命を奪ひ、公卿の北の方及び島主の妻月益御則を河内國志紀の山館に幽閉して其番をなす。或時月益御前より文を袂に入れらる。川勝これを讀んで慈文と合點し深く月益の不行跡を悲む。折しも垣を破つて闖入する者あり。川勝之を捕へて見れば月益の二子なるにぞ、乃ち月益の不行跡を語つて痛罵す。是に於て月益涙に暮れながら其文を逆に讀上ぐれば、二子を思ふ情切なるものなりければ、川勝感極つて誤解の罪を謝し、今より直に天皇の御味方なりと大呼し、直に凶人を開放し、相番弓削廣海を縛して追拂ひ、位牌の一片を取出して月益の

かへいじ

茶碗屋嘉平次。一つ屋五兵衛の子なり。大阪大和橋濱納屋板園の家に陶師商を營む。伏見町柏屋の遊女おさがに馴染み、許嫁の養女おきは婿するを嫌ひ、父に疎まれたる上に印傳屋長作に商品を詐取されて窮し果て、おさがと共に夜中瀬川屋の我家に立寄る。折しも父五兵衛がおさは伴ひて來り、おきはと祝言の盃をよせんとす。嘉平次當座遣れに猶豫を請うて結婚を誓ふ。五兵衛さらば固めの盃せんとて嘉平次に菘蕪の大皿を受けさせ、之に蠶を傾くれば酒にはあらぬ一歩銀難く盛上げらる。祝儀は明日のことと再會を期して別る。然るにこの銀もやがて長作に奪ひ去られ、最早これまでと覺悟を定め、生玉社茶店の側まで迷ひ行きておさがと情死す(生玉心中)

かへいじ

松下嘉平次。遼州濱松の任人にして眞繁肥前大領久吉の舊主なり。久吉天下掌櫃の復讐見坂に行きて久吉に謁し、己が頼阿通の胎兒は城之介善忠公の胤なれば之を守立て、且阿通をして逆臣光秀に一味せし者の首を取らむべきを依頼し、久吉を誘うて濱松に歸る。是に於て嘉平次は阿通をして反逆に一味の連判したる科より、阿通をして己を併殺せしめて阿通の手柄となし、以て阿通の子を守立てしめんとしたり(本朝三國志)

かまたり

大織冠藤原鎌足。鎌足の女藤原姫を唐太宗皇帝の如となし、兩國の好みを結んで逆臣蘇我人麿を誅せんとす。唐よりは萬戸將軍雲宗を使者として花原野、酒原石面向不背の玉などの進物を齎して我國に來る。入鹿怒つて帝を幽し鎌足を追放す。鎌足讀州志戸浦に到り若狭之介則風に庇護せらる。折しも雲宗の浦に玉を龍宮に奪はれたりと披露す。鎌足乃ち則風の妻滿月をして龍宮に入つて玉を索めしめ、且曰くその玉なきは素より知るといへども、これを明言すれば佛教及び兩國の威信に関する所大なるを憂ひかく玉を得たりと、乃ち大聲して曰く面向不背の玉を相共に都に上る。鎌足盲目の状をなして入鹿を欺く。雲宗入鹿の暴逆を責めて取押へたるか鎌足入鹿の首を刎む(大織冠)

かみち

笠原阿龜。大阪北久木町古道具商長兵衛の女にして與兵衛の妻なり。與兵衛が舅の妻いま及び其弟傳三郎にいちめられて家出する。お龜は夫の身を案じて大阪二十二社に詣で、神子町の梓巫女お辻の家に立寄つて夫の口容を讀み、常に家内不都合の爲に胸を痛め、剩へ傳三郎より挑まれて大に怒り、身の不運を歎きて夫と共に死を謀り、五月十七日の夜陰に乘じて家を出で、梅田堤に走つて死す。行年十五(ひぢりめん卯月紅葉)

かめく

龜菊。喜瀨川の遊女なり。假粧坂の少將と曾我時致との媒介をなしたるを抱しに憎まれて大夫より端傭城に落ちる。或夜朝比奈義秀・秩父重保の袖を捉へて明賢女郎の虎御前少將を連れ来るやう懇請したり(曾我虎が鷹)

かや

堂島新地藤屋の船老なり。雌與平母子が大夫吾妻に附屬ふはれて之を斃む(壽門松)からいと 唐糸。波路七郎俊兼の妻なり。俊兼零落して人質となつて隅田川畔に住し、主君吉田行房の子楠若と知らずして撲殺したるを無りて自刃するや、唐糸その罪滅しの爲接待の渡船を營みしが、或日楠若の母の班女を乗船せしめて、楠若の最期を語つて墓前に念佛を唱へ、班女と共に京に上り、吉田家を横領せる菅隆大將百連を滅す(雙生隅田川)

かまきぬ

唐衣。長尾輝虎の重臣直江山城守實綱の妻にして、武田信玄の重臣山本勘介の妹なり。夫の意を受け勘介をして輝虎に仕へしめんとし、勘介の妻阿勝の筆跡を撰し、老母大病の偏害を認めて勘介を呼寄す。

勸介来つて其情を察しお勝を責む。お勝乃ち唐衣を恨んで之と決闘に及びしが、老母即ち兩女の間に飛入り義理を立てて死す(信州川中島合戦)

からこと 唐琴。新田義貞の部將瓜生判官保の妻なり。元弘三平卯月下旬義貞鎌倉攻の軍評定を開くや、唐琴その席にありて、義貞の弟藤屋次郎義助と和睦すべきを述べて義貞を諷す(相模入道正次)

かるも 刈藻。建禮門院の侍女なり。平重盛の家士左京之進義次と契り、加賀郡司師高に横簾慕せらる。養和元年九月北山に茸狩の御遊ありし夜、義次と密會せるを師高に知られて連れしが、嬖妬となつて浮名立ちし爲官仕のお暇を願へど、師高に妨げられ舟岡山にて殺されんとせしは、繁藤浦口瀧方に助けられて志賀の里に養はる。或書の夜義次、横笛を伴ひ来つて宿を請ふ。是に於て夫妻相逢ふを喜べる際、横笛響きに堪へずして絶息す。刈藻乃ち皆て建禮門院より賜はりたる藥王香を焚いて横笛を蘇生せしむ。義次と共に辛崎大明神に参詣し、建禮門院より召還の使者戸無瀨の局に邂逅し俱に都による(娥歌かた)

かんき 甘輝。明の五常軍散騎將軍にして獅子城主なり。妻の錦祥女が義を重んじて自殺するに及んで即ち大義に歸し、國性爺等と共に逆臣李蹈天及び鞆廻の兵と戦ひ、李蹈天を殺し鞆廻兵を驅逐す(國性爺合戦)

逆心あるを養す。甘輝之を誦歌せしめ、神護皇女と祝宴の席にて國性爺の日本風を好むを意見して絶交するに至る。この夜石門崩反して攻密す。甘輝乃ち永懸帯を護り血路を開いて遁れ、雲南道石山の麓なる叔父陳芝豹に身を寄せしむ。陳芝豹の妹福玉等の心を邪推し之を斬つて逃ぐる(この所は演義三國志。曹操が呂伯奢の家に宿したる妹の顔姿に途に、幽水堤にて陳芝豹に出合つて之を斬付け、阿克將を殺し廣東の津に落延び、此處より乗船して國性爺の據れる東寧郡に航し、城門に至つて國性爺の一字錦舎に逢ひ、陳芝豹の子の萬福に冠を打落され、國性爺と和睦す。かくて後鞆廻兵攻密せたる際、國性爺と協力して之を滅す(國性爺後日合戦)「獅子が城(六〇五頁)をも見よ。

かんじふらう 勘十郎。播州姫路本町米商但馬屋の手代にして悪漢なり。相手代清十郎の父佐治右衛門を騙して主人の娘お夏のお嫁入道具の積送を禁止せしめて、主人より預れる嫁入道具の支拂金を着服し、主人に讒訴して罪を清十郎に負はしむ。清十郎殿刑の場に勘十郎の罪状呈録して刑に處せらる(五十一年忌歌念佛)

きうさく 久作。藤葉帯刀太郎廣房の邸に奉公し下婢と密通して産落し、江州伊吹山の麓に女房を養む。嘗て廣房より平國の寶物を取来りしが、廣房の妻子寶物を得んとして奪を預りしが、久作悪心を起し寶物を強漢の通話任に與へて恩賞に預らんとして還に謀められ、夜陰に乘じ廣房の妻子を刺さんとし、誤つて我子の萬虎を刺し妻を殺し、なほ廣房の妻子を殺さんとして廣房の子の房若に斬殺

さる(抱符風本地) 山崎與次兵衛の妻なり。山崎淨閑と梶田治部右衛門と將養をなせる際、その側にありて脚絆金を出して夫の鞆を救ふべきを願す。後に淨閑の書に従ひ夫を遊女吾妻と共に出奔せしむ(稻門松)

きくひめ 菊姫。花園大臣の息女なり。八潮の里に住し豫て野中納言實朝に思を寄せ。或日柴藪となつて出で、實朝に邂逅して我家に連れ歸る。この夜敵攻密せて實朝を捕め去り佐渡に流す。菊姫乃ち實朝を慕うて佐渡に下り、郡司山城入道三郎に懇望されて書寄せられたるを破拒して縛せられしも、漸く遁れ刑罰の妙法坊に救はれて京に上る(用文森)

きさき 大阪本町新物店菱屋のお針女なり。同家の手代二郎兵衛と相思の仲となる。菱屋の別家の由兵衛もきさに懇望す。きさき、二郎兵衛が主人に灸する間に主人の鍵を盗み、きさきの父がきさを由兵衛に與へんとの説文を引割かんとして戸棚を明けたるを由兵衛に見られて聞者を起し、きさき悪名を買ひ主家を出されて姉の所に預けらる。是に於てきさき甥に姉の家を脱出て二郎兵衛と會し、相共に今官憲比須森に走つて情死す。年二十七(今官心中)

きさきらぎ 更衣姫。横山郡司信久の娘なり。姉照手姫の山雀を取逃したる爲、其機嫌直しに小栗判官兼氏を姉に媒介す。後に兄の三郎重次が姉を水入せしめたりと信じて悲しむ。遂に海に投じて死す(當流小栗判官)

きさきおもん 吉田屋喜左衛門。新町九軒町吉田屋の主人なり。藤屋伊左衛門落魄して來りしを優遇す。扇屋の名妓夕霧が平岡左近に誘ひ出さるる約成るや、夕霧を連れて左

近の宅に届けしも約破れ、夕霧を連れて扇屋に歸る(夕霧阿波鳴渡)

きさきんだ 喜三太。常盤御前の輿に従うて行き、五條の橋上にて牛若に遇うて主従となり、平家の家士經時を殺す。後、源氏の家士龜井六郎重清より常盤の形見品を得て牛若に傳ふ(孕常盤)

土佐坊昌俊が常盤を討たんとし堀河の邸を襲ひし時、喜三太防戦して功あり。後、嵯峨の奥なる祇王祇女の庵室に靜御前を奪ねて之と逢へる際、梶原景季に攻密せらる。乃ち奮戦して之を破り、大間源藏を捕へ其符を折つて放つ間に、靜御前が敵に奪去られしかば、之を取戻さんとして其行方を尋ね、美濃國青野が原にて景季と出合ひ、その携へたる義經追討の院宣を奪ひ、景季を擣めて奥州に下り義經に謁す(藤原胎内控)

ぎしのめんめん 義士面面。文和三三年冬の半島武藏守師直の鎌倉飯島の屋敷を襲ひて主君隠形判官高貞の誓を報じ、主君の善退所光明寺に引上げて從容刑に就く(善退太平記)蓋し赤穂四十七士の作誓にして義士戯曲の最初のもなり。大星由良之介(大石内藏之介良雄の誓名)「ゆらのすけ」を見よ。

岡平(坂吉右衛門の誓名)。義士討入前に死す。「をかへし」を見よ。大鷲文吾(大高源五の誓名)。掛矢を掲げて討入る。小寺徳内(小野寺十内の誓名)。半弓を持って討入る。竹森喜多八(竹林唯七の誓名)。大長刀を掲げて討入る。





きんととき 坂田金時

源頼光の四天王の一人にして臂力極に超ゆ。藤原朝の檢屍に壬生の里に行き、番人小餘親新左衛門尉景春を詰責し、清瀧の種を鮮き、女御殺害者として供着を轉し連れ歸る。かくて後漢邊綱等と共に按察左大将早岑の城を攻取り、早岑を捕へて首を抜く(弘敷殿編羽庭家)

坂田藏人行の魂體狹野八重桐の胎内に入るや、八重桐愈ち山姥と變じ、信州上野の山中にて金時を生む。幼名を快重九と云ふ。額面朱の如く獸類を裂いて食となす。或日源頼光に逢ひ、母の命により荒蕪と稱號して非凡の力量を發揮し、頼光の臣となつて金時と名乗り四天王の一人となる。江州高懸山の羅鬼退治の先導をなし、惡鬼と奮闘して武功を立つ(堀山班)

公時顔面朱の如く臂力絶倫にして氣質荒し、浴中の夜禱りをなして、咒喚齋明の首を引致き保備を殺す。また頼光の命によつて頼平の討手に向ひ、箕田二郎義の頼平を誅めて切腹せし血刀と、懸緒なしの烏帽子を持歸つて頼光に差出す。かくて後葛城山の土蜘蛛退治に従つて武功を立つ(關八州駈馬)

きんよし 藥師寺次郎左衛門公義。高武藏守師直の嫡子なり。師直に陪從して清水寺に參詣し、鹽谷判官高貞の奥方を捕へて師直の意に従はしめん。奥方これを概拒して爲に大事に至らんとす。是に於て公義古淨瑠璃和田義盛酒宴の段を演じて其靡を紛らす(兼好法師物見車)

高武藏守師直の茶會に招かれ、遅れ來つて滞在す。この夜鹽谷判官高貞の遺臣大田出良之介等四十七士に襲撃せられて、水門の箱櫃の中に入らざりしを探出されて斬らる(基盤太平記)

くうかい 空海。父は佐伯氏、謫朝多度の人なり。遣唐使左中将藤原光輝と共に渡唐して長安に至り、清涼山に入つて文殊師利菩薩に遇うて金剛兩部の秘法を授かり、また般若三藏に遇うて黃卷宗輪の經典を授かり、獅子に乗つて胡髻を過ぎ日本國中を翔廻る。或日西寺の前を歩ける時、光輝が西寺の僧尊の爲に難に遭はるを見て之を助け、己が弟子となして高野山に連れ歸る。光輝の妻以呂波の前夫を尋ねて神宮宿に來り、谷に投身せるを見て空海之を救ひ、以呂波の前と共に蓮葉に乗り雲霧を分けて京に上る。後に朝廷より雨乞の新祿に召され、西寺の僧俗守敏等と法力を較して之に勝ち、守敏をして閑死せしめて大雨を降らす(以呂波物語)

くざゐもん 但馬屋九左衛門。播州姫路本町末間屋の主人にしてお夏之父なり。手代清十郎がお夏と情交を結べるを怒り、また手代勘十郎の言を信じ、遂に清十郎を放逐す(五十年忠歌念佛)

くだらだいなごん 百濟大納言。大海原王子の逆心一味し、嵯峨天皇を流し奉らんとして牟婁を押立てて行く途中、空海に

くたにただ 後藤左衛門國忠

遇ひ、其法力によつて苦しみたらる(嵯峨天皇甘露雨)

くにととき 三保谷四郎國時。源頼朝の命を奉じ、京都堀川なる源九郎義經の討手に上り、九條北町柏屋に登樓して義經に邂逅し、經に事告して經に言掛り、義經の家士片岡八郎と首告して經に責け、頭を柱に打付け、負傷し、義經の歸途を要撃して片岡八郎、武藏坊辨慶の爲に斬殺さる(吉野忠信)

くになが 長谷部國長。浦島の系圖を盗みて浦島太郎久壽の末孫久富と詐稱し、嚴島大明神の神主となりしが、久壽の玉手箱より緊要引くや、忽ち罪を悔悔し血を吐いて死す(浦島年代記)

くになが 三好淡路守國長。三好経理入道長慶の子なり。足利義昭が其兄義隆將軍に代りて勅使に謁見したるを始めて、謀反の志あるものと罵りしが、父長慶に拔討にせられて死す(津國女夫池)

くにひこ 吉備國彦。吉備武彦の弟なり。神賢姫に従ひて筑紫に下る途中、三草河原にて筑波長脚の兵に要撃せられ、奮戦して之を退く。筑紫三垣の所に行くと八十鼻脚の書状を携へて大権王子の所に行くと、其書を断つて其書状を奪ひ、鼻師の重臣藤速を叩殺

して武功を立つ。後また日本武尊の東夷外甥忍熊征討の軍に従ひて功あり(日本武尊昔妻連)

くにひさ 番場忠太國久。梶原景季の家士なり。番御前を捕へて久として本田次郎近經に投擲せんとす。後に三島の楯にて木立に遇ひ、小柴郡司の家に宿を借らんとし、拒絶せられて怒り郡司を殺害す。また相模川の邊にて近經と口論せしが、頼朝の御符馬御の時曾我三子及び小柴郡守重重に殺さる(大藏時雜物語)

くにひで 淺野四郎國秀

伊藤祐近の臣なり。主命により頼朝の子千鶴丸を竹の篋巻にして松川の奥とどきの湖に沈む(頼朝伊豆日記)

くにひら 錦戸太郎國衡。藤原秀衡の長男なり。父の死後鎌倉の命を奉じ、義經主従の首を討取つて飛返らんとし、内應の手紙を魚腹に入れて鎌倉の羽田に託せしが、弟忠衡に發見されて兄弟不和となる。國衡常に義經を妬みしが、母より其不心得を戒められて父の遺言を聽かされ、伴つて母の仰に従ふを誓ひ、なほも綿に義經を妬み、遂に義經を高館に攻めて之を逆殺す。後、義經を襲撃し追撃し戦敗れて死す(源義經將系經)

くにへい 油屋九平次。平野屋徳兵衛を欺きて銀二貫目を奪ふ。生玉社の出家屋にて徳兵衛に逢りて其遺跡を督促せらる。九平次乃ち其は取り銀を借りたる覺なるとして徳兵衛を襲撃打して殺す。後、天満屋より歸る途にて、徳兵衛の叔父久右衛門の爲に戦死され且代官所に訴へらる(曾根崎心中)

くにへい 岸和田の九兵衛。彌羅昇な

くはへい 岸和田の九兵衛。彌羅昇な

くはへい 岸和田の九兵衛。彌羅昇な

人名部

り。雜質屋お梅の書状の使せしが、其書状の手廻りよりしてお梅と久米之介の密通暴露し、爲に久米之介吉祥院を放逐せらる。是に於て久米之介・九兵衛の兩人雜質屋に來り、九兵衛諸器を交へつつ久米之介、お梅を夫婦たらしむべきをいふ(心中萬年草)

くまへい 西陣の九兵衛。京都四條石垣町井筒屋の抱城お花の養父なり。お花を年増しにして二十兩を得んとす。お花養父を恨んで其意に従はず。是時お花の愛刀屋の手代半七現はれて九兵衛を突除く。九兵衛怒つて半七と格闘し、半七の鬚を纏んで引立つ(長町女腹切)

くまげんだ 熊源太。藤原教孝後妻の弟にして驍漢なり。教孝の嫡子民部丞孝房の僕須磨藏を殺し、孝房の室及び中務秀光等の淡路をさして落し行くを追駈して孝房の室を奪せしが、後遂に印刷の彌七郎に捕めらる(賀古教信七墓廻)

くまへい 榊職久馬平。山登王子が玉世姫の邸を襲撃したる時、久馬平躍出でて花入親王・玉世姫の危急を救ひ、王子の部下の小野土丸を祖伏せて之を殺す。後に慶長皇子の軍に従ひて山登王子を丹州に攻めて滅す(用明天皇職入鑑)

くままろ 藤原能磨。左中将藤原光輝の兄なり。光輝の渡河中光輝の愛人以呂波の前を口説きて己が意に従はしめんとし、能はず。或日以呂波の前の邸内に忍入り、光輝・以呂波の前を奪せらるを見て痛罵し控詞を踐して去り、老母に逢ひて光輝を謀せしが、母信ぜずして光輝を庇ひしかば怒つて母を弑し、光輝に斬付けて逃走し西寺の守敏に身を寄せ

しが、罪惡覺して畜生門の刑に處せらる(以呂波物語)

くめのすけ 成田久米之介。成田武右衛門の子なり。十二歳の時鎌倉の喧嘩より其友伊吹卯之助を殺し、高野山に登りて南谷吉祥院の寺小姓となり、神谷の宿雜質屋のお梅と情を通す。お梅が吉祥院の法印と久米之介に渡す。お梅の書面を岸和田の九兵衛に托せしが、その書面の破綻よりして久米之介お梅の密通暴露し、爲に祐輔律師及び伊吹卯右衛門等に毆打されて吉祥院を去る。然るに雜質屋に來る。是時お梅の親、お梅を罪澤屋作右衛門に嫁せしめんとし其宴を張る。然るにお梅は其結婚を嫌ひて久米之助を愛し(着想の妙はこのあたりにあり)この夜兩人相共に遁れ、二月七日の夜高野山女人堂の傍に情死す。行年十九(心中萬年草)

くもずみ 別府郷武者雲澄。百合若大臣の郎黨にして別府雲澄の弟なり。かねて逆臣を拘く。百合若が蒙古を征服して交界島に凱旋するや、其熟睡する間に兄弟相謀りて遊島に流し其邸を傾覆す。後、有馬の湯に入浴中府内大夫秀主父子に襲撃せられ身を以て免る。これより蒙古の寇に姿を變へ、百合若を遊島に攻寄せしが敗れて死す(百合若大臣)

くもたる 別府郷武者雲足。百合若大臣の逆臣にして別府雲澄の兄なり。百合若が蒙古を征服して交界島に凱旋し、其熟睡する間に兄弟相謀りて之を遊島に流し、其邸を傾覆ししが、内中安しに堪へず深く籠り、櫻葉と云ふ巫女の言を信じて遊山に出で、遂に百合若若徒に襲撃せられて滅ぶ(百合若大臣野守鏡)

くりからたらう 俱利伽羅太郎。普丞相の從者なり。勢力ありて今知曉と被名せらる。藤原時平が唐使英文と相謀りて普丞相を延喜帝に譏奏するや、俱利伽羅太郎大に怒り英文を捕へて踏躓り、時平が放ちたる猛獸と闘うて之を殺し悠悠として去る。普丞相流罪に處せらるるや、俱利伽羅太郎も罪を追て獄に繋がれしが、脱走して天拜山に死せり。是に於て悲憤に堪へず、頭を岩角に打付けて死し、其魂佛神となり譚者の一類を應殺せんとし内裏を是はためき渡る(天神記)

くわうべん 大江僧正廣辨。名越が谷の法華堂にて神呪を唱へ御齋を引きて、北條時頼の嫡子天女丸を源頼朝の再誕なりと判す(最明寺殿百人上臈)

くわうみやうまる 光明丸。播州賀古川の民部少輔孝房の子なり。祖母に化けたる蜘蛛に掴み去られんとしたるを須磨藏に助けられ、母に連れられて波路の方へ落ち行く途中熊源太に追駈せられ、漸く弱かれて中山寺に赴き、真如上人の弟子となりて眞光と法名す。人に騙されて遊女官城野を善護と信じて暮ふ。折しも官城野は愛人孝房の父教孝の配流せらるる罪を贖はんとし、眞光を唆して金を得んとす。眞光乃ち寺に歸り、閑浮樓金の碧音保を奪ひ出づるを上人に見付けられて深く誠められ、眞光恥ぢて死を決し、飛田墓所に迷ひ行きて縊死す。時に齡十三。然るに叔父教信信心堅固の功德によつて眞光蘇生す(賀古教信七墓廻)

くわげつ 花月。播州室津の遊女なり。大権冠鎌足の家士若狭之介則風と契つて金松

を生み、則風を誘ひて邸を逃走し、藤原邸に變装し彌福に乗つて市中を馳走し、則風が金松を奪ひて唐人行列の槍を賣るに邂逅す。こゝ時頼我入鹿の兵來つて藤原邸と思つて花月を奪ひ去る。後に花月入鹿の館を忍び出て、夫を尋ねて讃州志戸捕て赴き、夫の手にかかりて斬殺す(大権冠)

くわざんてい 花山帝。女御恒子姫の死を悼み給ひ、平安盛を召して女御に似たる者を問ひ給ひ、安盛を勅使として中納書高房の女三の宮を召さしむ。然るに二三の官行方不明となりしかば、帝はたかきみ給ひ、山科の花山寺に入りて落飾し給ふ。安盛乃ち右近の前を御如女に奉る(娘城酒呑童子)

藤原女御及び弘徽殿女御を御寵愛ありしが、按察左大臣將早岑の惡逆によりて藤原女御は害せられ、弘徽殿女御は憂愁の餘り白川の館に籠居し、尋で行方不明となりしかば、天皇世をはかなみ王宮を出でて花山寺に入り、落飾せんとせられたるを、安倍晴明等の忠勳により弘徽殿女御と御同様に還幸し給ふ(弘徽殿落飾産後)

くわせいふにん 華清夫人。大明十七代思宗烈皇帝の寵姫なり。慶應臨月に御産の用意ある折から、逆臣李滔天及び健甕兵に攻められ、大司馬將軍三井に連れられて海道迄まで遁れしが、敵將安大人に射殺す(國性筆合戦)

くわつてくわう に見上。

くわんじやまる 冠者丸。幼名を美女御前といひ、源滿仲の子にして母を小侍従といふ。母に従ひて能勢判官仲國に養はる。孟蘭盆會の日源頼光の身代となつて母に斬られ

んとするを推知し、差障として母に對面し、母の命に従ひて髪を梳る間に竊に一通の文を認めて髪の中に結込む。その文に、世の無常をいひ父母の恩を誦し、母細敷きに沈ませられて手を下し給はでは本意ならず。されば態と卑怯の舉動を見せまらせ、憎しみを受けて殺され奉る。返す返すも細名殘惜しとの由を記し、白帷子を著て持佛堂の前に坐し、從容として經を念誦す。母歎いて斬ること能はず。是に於て態と腫病の舉動をなして母に斬らる(蝦山姥)

**くゑはや** 阿蘇蹶速。筑紫の巨賤八十梟師の重臣なり。鼻師の命によつて貢物を朝廷に奉り、景行天皇弟二の姫宮神賢姫の御降嫁を奏請する使者となりて行き、筑波長脚との遊馬に勝ち、神賢姫の御降嫁を約して歸り、後に古備國彦に即殺さる(日本武尊吾妻鑑)

**くゑもん** 毛荆九右衛門。長崎生れの海賊なり。或夜門司が関に泊し、京商人小町屋惣七を我船に乗せしが、己が密輸入を目撃したるの故を以て之を海に投込み、博多に航して柳町遊樂與田屋に登樓し、偶然再び惣七と相會し、脅迫して仲間に入れ、惣七の馴染右衛門小女郎を身請けして惣七に與ふ。後に九右衛門等の惡事露顯して逮捕せられ、死罪一等を蒙じて追縛はる(博多小女郎被控)

(序云この作は長崎奉行所の抜有細編書物仕草書に見ゆる享保三年秋海外密輸入長崎著けつり八右衛門を脚色したるものにして、實説は月堂見聞集卷十に見ゆ)

**くゑもん** 平野屋久右衛門。徳兵衛の叔父なり。徳兵衛を尋ねて天満屋に來り、遊女お初に逢うて徳兵衛がその惡友九平次の

爲に觀二實目を取敢せられ、且罵詈駁打されたるを聞き、直に九平次の驛擊に向はんとせしが、お初に宥められて異に入る。後、九平次天満屋に來て、徳兵衛を罵詈し、薩遠印判のことに、徳兵衛より觀二實目を許取したることに、其背後にありて聞き、直に聲を掛け七首を突付けて其首を確め、殿打して代官所に渡す(曾根崎心中)

**ぐんし** 小柴郡司。浪入して三島宿の農夫となりしが、雷亂に罹りて將に死せんとせしを、靜前より靈藥を施されしを服して蘇生す。是に於て其恩を報ぜんとして、靜前前の敵番堀の思太夫久と戦うて死す。行年六十八(天磯虎稚物語)

**ぐんすけ** 軍助。吉田少將藤原朝臣行房の奴なり。悪漢常陸大塚百連と戦うて其臣若熊八郎を殺し、百連を追拂ひ、行房の子熊若君を買ひて北白川に通る。梅若が逆臣勘解由兵衛景造に唆されて漢文帝の誓ける鯉に點睛するや、鯉生動して池に入る。軍助即ち水を漕つて鯉を掴み其胸を刺す。是時景造、行房を弑す。軍助、景造を池に投じて殺し、梅若君の行方を尋ねて諺州多度津に下り、天狗に出會ひて斬付けしが、天狗風に捲上げられて吹飛はさる。後に百連を襲撃して百連の家來を殺殺す(雙生岡田川)

**ぐんばら** 俱牟婆羅。提婆達多の臣なり。婆特が鳩を殺したるを責め、鳩の重量に等しき婆特の肉を強求す。婆特乃ち肉肉を裂きて之を與ふ。俱牟婆羅は肉肉不足らずと許さず。婆特大に怒つて秤を折り俱牟婆羅を追拂ふ(釋迦如來生會)

**ぐんゑもん** 軍右衛門。澤村信松の奴なり。濱松の土城郡郷左衛門の小姓山崎小七郎の美貌を慕うて之を挑み、遂に小七郎の兎半兵衛の仲介によつて小七郎の妾となる(心中宵庚申)

**けうどんみ** 橋曼彌。摩耶夫人の姉なり。釋尊降誕の場に亂入して吉祥女に追拂はる。後に耶輸多羅が一子羅摩羅を伴ひて釋尊涅槃の場に赴く途中、其袖を捉へて作りし罪を懺悔し、摩訶迦葉に逢うて授戒を受け、比丘尼となりて釋尊涅槃の場に赴く(釋迦如來誕生會)

**けんかう** 吉田兼好。卜部兼顯の三男なり。姫君の官に洛外の風景を説明し、官より高武藏守師直に懇懇せられて厭はるる由を聞き、待従といふ女房をして師直に鹽谷高貞の家へ美人なるを語らしめて思を轉せしめ、且つ自ら師直の晴書を代筆して高貞の室に送る。後に法師となりて徒然草を著げる際卿の官奪來られ、待従の父太妻又五郎も狂亂して來り、鹽谷高貞の室も師直に追はれて逃げ來る。是時師直の家士小林民部百端を率ゐて高貞の室を捕へんとして攻奪す。兼好等奮戦して之を脱す(兼好法師物語)

**けんくわう** 源京。淨土宗の開祖法然上人なり。口唱念佛を勸進し、建久元年三月中旬黒谷のりうぜん寺にて語佛と宗乘の問答をなし、正法の不思議を見せらる(大原問答)

**けんくわう** 岩村源九郎。岩村源五の一族なり。照演師高に屬して強盜となり、志賀平崎大明神にて戸無齋刺を刺さんとして過つて師高を刺し、左京の進義次等に殺さる(猥歌かた)

**けんご** 岩村源五。加賀郡司師高の部下なり。師高の命を奉じて川藤を舟岡山に連れ行き、之を斬殺さんとして齋藤澁口頼方の爲に追拂はれ、卯塔の極に墜れしを、源五の部下ども逃げんとして卯塔に押寄せし爲、卯塔崩れて壓死を遂ぐ(猥歌かた)

**けんご** 鳴瀬源五。荒金刑部山國の家士なり。山國反して主家を覆領し榮花を極むるや、源五乃ち山國に勸めて坂上田村麻呂討らんとし、山國と共に變裝して土山に下り、田村麻呂の北の方の一村を襲撃せしが、遂に馬方六藏に殺さる(田村要親初書)

**けんごべ** 菱川源五兵衛。薩摩者なり。同所來迎院の小僧となり、濱の町若布屋の娘おまんを通じ、罪を得て京に上り、但馬城主の京都の邸に奉公し、勤仕女の小萬に挑まれたるより事起り、笹野三五兵衛にその父の仇の居所を教へ、身は女中部屋に入りたる罪によつて家老藤原與茂大夫に放逐され、薩摩に歸り一事介と替名し、若布屋の丁稚となりておまんと關係を續けしが、おまんの繼母に迫出されて我家に歸る。然るにおまんなは源五兵衛を慕ひて尋ね來り、おまんの繼母も其後を追ひ來つておまんなを連れ歸らんとす。源五兵衛はおまんなを渡すを拒んでおまんの繼母に斬付け、また親つておまんなを斬り、自らも死せんとして割腹せしが、笹野三五兵衛に救はる(薩摩歌)

**けんざう** 大間源藏。梶原源太景季の郎等なり。景季に従ひて駒前前を詮察し、北條畷なる瓶衣女の庵室に留寄せしが、喜三太と戦うて敗れ、佛壇の中に逃入りしを捕へられ、母を折られて放たる(藤原内侍)

げんざあもん 「まさくに」を見よ。

げんしろう 和田新發意源秀 桐氏の一族にして容貌魁偉骨力あり。櫻井藤にて新田義貞の室宮内侍が難儀に遭へるを見て之を救ひ、自ら内侍の褌に乗りて大森盛長の宅に行き盛長を追捕ふ。後、内侍等が三種の神器を捧持して吉野に至る途中、坊門宰相清忠等之を路に要して奪はんとするに會ひ、源秀乃ち清忠を追うて之を斬る(吉野郡女楠)

げんじふらう 源十郎 播州姫路本町

米商但馬屋の手代なり。相手代清十郎が主人の娘お夏と密通せるを相手代清十郎に報告し、勤十郎と謀りて清十郎を陥れ、清十郎がお夏より借りたる金を奪はんとする奸策を謀合せしが、この夜清十郎に殺さる(五十年忌歌念佛)

けんしん 「てる」とらを見よ。

けんたいふ 源太夫。尾張の豪盛なり。日本武尊を誑まひ姫姫姫を尾加女に奉仕せしめて妻に之を秘せり。折しも東夷の首領外濱忍熊の重臣芙蓉羅來つて日本武尊を誑まへるかを取調べ、源太夫に湯起調を申渡せしが、挿姫の美貌を一見して忽ち湯起調を免し、其代りに姫を忍熊に奉らしめんとす。源太夫は妻の承諾したるを怒りしが、其心底を知つて怒解け、相謀りて娘の面に鐵鏝を當てて醜くし、以て忍熊に與へざらんとし、日本武尊が挿姫と入替つて嫁給へるとは知らずして細顔に鐵鏝を當て、忽ち天罰を受けて悶絶せしが、辱其罪を赦さるに及んで蘇生す(日本武尊吾妻鑑)

けんぱふ 憲法。

香春久太郎憲法の異稱

なり。放蕩の爲に家を放逐せられ、江戸の本郷に住んで染物業を営み御道を教授し、吉原の遊女吉岡と馴染みて久吉をまうけしが、財産を隠匿して行方不明を晦し、弟子石川五右衛門の合力を受けて京都に放浪す。兄頼定が龍門家に嫁入して辱しめを受けんとする噂を聞き、之を救はん爲に自ら頼定と稱して龍門家に至り、尋で兄と口論することとなり、母に叱られて去る。後に禁中御能の拜殿に出で見物人の中に入りしが、龍門家の重臣舟越惣馬憲法を見るや、故意に其頭高として棒にて毆打す。憲法立退きしが平素の遠懐を時きしもの、七首を懐にして引退し、見物人に紛れ惣馬に近づきて之を刺殺し、直に名理を上げ空手を斬拂ひて逃走す。これより虚無僧となり大阪三軒屋に来て妻の吉岡に遇ひ、遊女屋の主人又五郎に談じて抱妓吉野と吉岡との交換を請ひ、吉野を伴うて去る。身長十五年久吉が五右衛門と共に釜煎の酷刑に處せらるるや、其場に来つて懇歎に暮れ、官人に對して久吉何の罪あるかを語り、遊坂客人を種んで逃返る釜中に投込む(傾城吉岡衆)

けんれいもん 建禮門院。

天皇の御母君にましまし仁慈の徳に富ませ給ふ。養和元年九月十日其父戸無羅局を御使として内大臣重盛へ北山に其符の催あるや申遣はさる。重盛の奉答に獅懸瀧口頭方をして獻上の山雀を持たしめて遣はす。建禮門院の侍女積箇、瀧方に戯れたる際過つて山雀を迷す。加賀郡司御和ら給ふて口論となり建禮門院出でて和らげ給ふ。かくて北山に其符の御遊ありし時徳の鶴鳥を放たる。また御歌かるたの催ありし時節高好策を廻らし、重盛公より横笛の首を受取る使者の來れるを言はず。建禮門院これ聞かれて悲歎に沈ませ給ひしが、憤然として起ち横笛を伴うて入御し給ふ。戸無羅局出でて横笛の首を重盛の使者に渡す。其首箱を開けば笛を折つて入れ土を盛つてあり(御歌かるた)

けんあほうい 獨清軒玄惠法印。

後醍醐天皇御時の釋僧なり。北山に住み、尹大納言實賢の猶子維九、日中納言實朝の子阿新丸等を教授す。或日實朝の重臣石見守中原來り、實朝の命と伴りて阿新丸の種髪を依頼す。法印其書を信じて剃刀を取上ぐる際、實朝の家士左衛門藤原原助付け、中原を罵つて事情を語る。玄惠乃ち阿新丸の種髪を思止る。後中原反して種髪を極め新能を催するや、玄惠其書に給込み、論言を捧讀して實朝の舊臣等をして石見守誅伐せしむ(本朝用文章)

げんあもん 宮地源右衛門。

立賣に住み彼の師匠なり。因幡の藩士小倉彦九郎の養子文六に教を授けし、彦九郎の妻の種と養に陥り、かねてお種を横懸せる廢邊床右衛門の爲に言觸さる。後に彦九郎等の爲に堀川橋上にて女敵討に遭ふ(堀川渡波)

こいそ 小磯。

朝鮮に通商せし島谷道可の女なり。道可の死後落し、傾城に賣られて朔乳守町の遊女屋に勤む。或日加藤正清に高朝屋に擡げられ、小磯が嘗て父より譲受けたる朝鮮地圖を懇請せらる。小磯乃ち其地圖を高朝屋に與へて、己が情夫小西彌十郎の推擧を正清に與へて、己が情夫小西彌十郎の推擧を依頼す(本朝三國志)

こいちろう 小一郎。

萬年町紺屋徳兵衛のお辰の子なり。お辰小一郎に踊の髪を被せて嫁せられた、男の姿はそれをみて徳兵衛と誤り、徳兵衛はお辰の情夫と思つて引摺られは、奴天怒を振りながら母深偉いと流く(心中重井筒)

こいと 小糸。小秋の誓名。坂田前司忠時の女にして坂田藏人時行の妹なり。父が物部平太に殺されたり、佐後の中山の旅人翁露屋の下婢となり、同家の下男喜之介と情交密なり。或夜物部平太來つて泊し理髪を請ふ。乃ち髪を剃りながら情に喜之介と隠し合せ、忽ち親の敵と名乗るや、喜之介即ち平太の首を刎れ、小糸と共に出奔して源頼光に頼る(堀山姫)

こうきてんのよろこ 弘微殿女御。

花山天皇の女御弘微殿。藤原共仁懷胎し給ふ。弘微殿の伯父按察左大将早岑逆心あり、藤原女御を殺害し、また帝を弑し奉らんとす。弘微殿は伯父の逆逆を憂ひ、宮中を出でて白川の館に籠居し給ひ、天皇殿に通ひし給ふ。早岑の暴逆日に長ずるや、弘微殿その罪を一身に引受けて桂川に投身せんとせられしを、又五郎義長に助けられて男山八幡宮に世を忍び給ふ。蓬屋道滿來つて弘微殿を奪去らんとす。義長等奮戦して之を破る。かくて後、天皇弘微殿御同車にて都に還り給ふ途中、眞葛が原にて藤原女御の幽霊を逐ひ、遂て皇男子を分娩し給ふ(弘微殿御羽衣家)

こうじやくそうづ 恒寂僧都。

在原行平が龍王の子を若宮と稱して養育せるを見、河豚を與へて其子を毒殺せんとし海に釣糸を垂れしが、龍王に其釣針を咬切らる。是に於て行平を讓して勸勤を蒙らしめ、行平の愚者松風を驅逐して過海等に破らるるを言はず。建禮門院これ聞かれて悲歎に沈ませ給ひしが、憤然として起ち横笛を伴うて入御し給ふ。戸無羅局出でて横笛の首を重盛の使者に渡す。其首箱を開けば笛を折つて入れ土を盛つてあり(御歌かるた)

こいちろう 小一郎。

萬年町紺屋徳兵衛のお辰の子なり。お辰小一郎に踊の髪を被せて嫁せられた、男の姿はそれをみて徳兵衛と誤り、徳兵衛はお辰の情夫と思つて引摺られは、奴天怒を振りながら母深偉いと流く(心中重井筒)

こうじやくそうづ 恒寂僧都。

在原行平が龍王の子を若宮と稱して養育せるを見、河豚を與へて其子を毒殺せんとし海に釣糸を垂れしが、龍王に其釣針を咬切らる。是に於て行平を讓して勸勤を蒙らしめ、行平の愚者松風を驅逐して過海等に破らるるを言はず。建禮門院これ聞かれて悲歎に沈ませ給ひしが、憤然として起ち横笛を伴うて入御し給ふ。戸無羅局出でて横笛の首を重盛の使者に渡す。其首箱を開けば笛を折つて入れ土を盛つてあり(御歌かるた)

こいちろう 小一郎。

萬年町紺屋徳兵衛のお辰の子なり。お辰小一郎に踊の髪を被せて嫁せられた、男の姿はそれをみて徳兵衛と誤り、徳兵衛はお辰の情夫と思つて引摺られは、奴天怒を振りながら母深偉いと流く(心中重井筒)

る。廣澤池畔にて親張狂言の催ありし際、恒寂其狂言師に交つて行乎を狙ひしが浦島太郎に殺さる(松風村雨束帯巻)

こうたうのないし 勾當内侍。勅命によつて新田義貞の寮となる。坊門宰相清忠に掘められて大森盛長の宅に送らるる途中、櫻井輝にて和田源秀に救はる。かくて後小山田太郎高家の首を新田義貞と稱して梟せる場に狂女となつて来り、高家の妻と争ひ、また三種神器を捧持して吉野に至る途に坊門清忠に要撃せられしも和田源秀に救はる(女梅)

こうばい 紅梅。紀有常の重臣、金吾廣國の妻なり。有常の奥方と共に、有常自筆の手紙を受取り、愚案しながら封を切つて讀めば、中宮高子の首を刎ねて首桶に入れよとの文言なりしかば、奥方は繼子井筒姫の首を中宮の身代に立つべきを言ひ、紅梅は中宮を斬るべきを主張して、中宮の隠れ給へる泊瀬寺に馳せしが、民部太郎俊綱に縛せらる。奥方死して中宮の身代となるに及んで、奥方の心中を悟り得ざりしを悔ひ、死骸に向つて罪を謝し、中宮の御供して高安の里に在五中將葉平を訪ふ(井筒葉平河内通)

ころめ 小梅。博多の白木夫の娘にして荒藤太十六夜の妹なり。孝心深く老父を牛に乗せ糞籠を牛角に結付けて遊山に出で、老父より早く夫を持つやう望まれ、心ならずも香椎村の新作同村の勤作等の袖を引き、荒藤太に御顔されしが、慶兼竹に救はれて其妻となる(天神記)

こかん 幼名をおつやといふ。父は播州麻屋頭に奉公せしが、鷹を逃したる罪によつて浪人となり、こかんは娘の内大阪北野鍛錬煎餅

屋三郎兵衛方へ身を寄せしが、こも家運衰へ感病氣となる。こかん之を救はんとし身を買ひ、堀江の色茶屋に勤め、轉じて堂島新地中町平野屋の遊女となり、鍛冶職大文字屋の手代平兵衛と馴染む。折しも國元よりこかんを取戻さんとして使者來る。是に於てこかん平兵衛と別るを悲しむ、平兵衛に請出されて夫妻たらんとせしが、平兵衛請出金の調遣に窮し主家を放棄せらる。こかん身の不遇を歎き、國元の使者和田傳内及び娘に暗別を告げ、寶永六年六月一日の深夜平兵衛と共に走出て、北野神明宮附近の藍畑にて情死す(心中又は水の朔日)

こざらし 小晒。稻荷大明神の社人、大郎の娘にして美貌なり。大海原王子亂入せし時これをたらしめて殺さんとししが、王子に悟られて危き場を免る(嵯峨天皇甘露雨)

こざらし 小晒。稻荷大明神の社人、大郎の娘にして美貌なり。大海原王子亂入せし時これをたらしめて殺さんとししが、王子に悟られて危き場を免る(嵯峨天皇甘露雨)

こざらし 小晒。稻荷大明神の社人、大郎の娘にして美貌なり。大海原王子亂入せし時これをたらしめて殺さんとししが、王子に悟られて危き場を免る(嵯峨天皇甘露雨)

こざらまる 小猿丸。大雄王子の舎人なり。神醫姫の難症を忍入つて様子を窺ひしが、吉備武彦に射殺さる(日本武尊再巻)

ござあもん 「ぢへゑ」の條を見よ。

ござんけい 吳三桂。明の忠臣なり。右將軍李爾天の逆心を察して帝を諫むれども容れられず。李爾天遂に反し、鞏親兵を導きて皇帝及び華清夫人を弑すや、吳三桂乃ち皇妹梅麗皇女を妻の柳歌君に託して逃走せしめ、自ら幼皇子を抱きて山中に隠匿するこゝと七年。九仙山にて二仙術甚によせて國性爺恢復の軍を起すを密刑に處し、鞏親王を追ひ、太子を討て即位せしむ。之を永曆皇帝と云ふ(國性爺合戦)

鞏親王の第六王子駒馬親平が永曆帝に謁して幻術を行へる所に吳三桂仙人に化して現じ、順の字を分解して二百八十一となし、明朝創業元年より二百八十一年目の今年明朝滅亡すべしと奏して消失す。梅麗皇女勾容縣にて敵に追撃せられて危急に及べる際、吳三桂再び現はれ皇女を助けて去る。後に國性爺が東寧島にて鞏親王の軍と戦つて之を破りたる時、吳三桂現はれて國性爺の戦亡を語り、梅麗皇女を國性爺に渡す(國性爺後日合戦)

（序に史實を云ふ）吳三桂は遼東の人。毅宗帝の命を奉じ李自成を破らんとし、遂に既に燕京陥り帝國難に殉せることを聞き、乃ち援兵を清に請ひ、李自成を破つて雲南に據り、康熙二十二年兵を擧げて清に抗せしが同十七年病歿す

こじじゆう 小侍従。源満仲に仕へ、滿仲の胤を争みて冠者九を生む。後に冠者九を連れて能勢判官仲國に嫁す。偶源頼光來つて身を寄す。仲國夫妻之を厚遇せしが、弘福盆會の日小侍従頼光を擁護する席に侍して哭

し、頼光に怪まる。乃ち我身及び冠者九を來歴を語る。かくて宴終りたる後閉に夫に呼ばれて清原右大將高藤より寄せたる手紙を見せ、其心意を尋ねらる。其文意に「頼光を斬つて内應するに於ては冠者九を取立つべし」とあり。小侍従思案の末、頼光を討つ由を答へて助勢を頼み、然る心底には冠者九を斬つて頼光の身代りたらしめんとし、冠者九を佛堂に招き、經を讀誦せしめて其背後より一討にせんとし思ひ定めしが、親子の情に絆されて果すを得ず、感極まつて聲を上ぐ。冠者九怖れて逃げまどふを母引捕へて首を刎ね、其響を解けば中に一通の文あり。其文意に「世の無常を云ひ頼光の恩を謝し、母御歎に沈まされて手を下し給はでは本意ならず。されは殊更に卑怯の舉動をなし、憎しみを受けて殺され奉る。返す返すも名殘惜し」との由を記す。是に於て母悲嘆に暮れ自殺せんとして夫の仲國に制止せらる(娘山姥)

こしらう 山脇小七郎。遠州濱松の土坂郡尾左衛門の小姓を勤め、美男なりしかば多くの人人に戀慕せられたれど、兄弟半兵衛の媒介によりて奴軍右衛門の若衆となる(心中寄席申)

こじよう 伍乗。芙蓉嶽に住み、軍術に長じ門弟子三百人を養ふ。或日庵民子が六安王の命を受けて天子の寶篋を緝ふる由を聞き、其宅を訪つて朱一貫を見し大貴人の相あるに驚く。後に朱一貫を擁して主となし、三萬の兵を率ゐて福建國守六安王を其城に攻めて滅す(唐船斬今國性爺)

こじらう 京小二郎。曾我二子の異父兄なり。富士の狩場にて河津三郎一二代記の辻講

釋をなし、赤澤山に河津三郎重が討たれたることを語つて鬼王兄弟に聞せられ、曾我二子に一味して父の敵討すべきを勧められ之を罵つて逃ぐ。後に僧衣を着して大薩遊郎に託成時宗を訪ひ、二子の舉動を、工藤祐經の下人近江・八幡に内通し、また葛籠に入つて二子遊興の場に紛込みしが遂に二子に斬殺さる(曾我五人兄弟)

河津三郎祐重が京に滞在中、賤女と通じて生れたる子にして性根劣なり。石橋山に遇せられたる箱根権現の野鐘を盗んで股野五郎景久に捕へられしが、熊野の手にある名助友切丸を奪うて景久に渡すべきを約して放免せらる(本領曾我)

曾我二子が工藤祐經を殺したる後、小二郎は祐經の下人たりし近江・八幡と謀り、五郎時宗と詐稱して越後國上寺に禪師坊を訪ひ、之を誑めんとし却つて禪師坊に欺かれ、禪師坊・鬼王兄弟に殺さる(加増曾我)

京小四郎に作る。工藤祐經の室に頼まれて間諜となり、曾我家に入込みて祐成時致の動靜を悉く祐經に密告す。曾我二子が遂に祐經を斬つて父の讐を復したる後、頼朝は小四郎の賄劣を惡み、髪を剃らしめて放逐す(曾我倉橋山)

**ごしらかはほわう** 後白河法皇。平清盛の爲に鳥羽の里に幽らせられ給ふ。平重盛の死後頭陀修行に出で給ひ、源氏の家主鈴木三郎重家に遇うて平家追討の院宣を授けて牛若に傳へしめ給ふ(孕常盤)

**こたらう** 姉川小太郎。佐佐木盛綱の重臣なり。主君の領内備前兒島の民の争論、公事訴訟を裁決す(佐佐木先陣)

**こたんしやうらい** 巨且將來。吉備國の豪農にして性気豪爽なり。父を虐待し、また弟蘇民將來の子手質石を養子となすと稱して弟の田地を奪ひ、妻五百機の讎むるを更に用ゐず。弟の妻藤原より惡鬼の手形に御守を奪ひて巨且大王たらんとす。後に父及び妻と争論し、過つて敵にて父を斬殺す。是に於て其屍を弟の田畑中に埋めて、罪を弟に負はせんとし妻の爲に惡事を暴露せられ、遂に蘇民將來夫妻の爲に斬殺さる(日本振袖袴)

**こぢよらう** 小女郎。伊勢國鈴鹿郡開の宿白子屋左次の内の出女にして、小萬の朋輩なり(丹波異作)

**こぢよらう** 小女郎。筑前國博多町町の遊廓奥田屋の妓なり。京商人小町屋惣七に馴染み、毛判九右衛門を海賊と知らずして金を借らんとしたるに事起り、小女郎誦出されて惣七の妻となる。惣七情に解されて海賊の仲間となる。後、九右衛門惣七等の惡事を暴露す。惣七、小女郎と共に伊勢路に遁るる途にて召捕へらる。惣七愧ぢて瀕船の中に自刃す。小女郎は罪を赦されて夫の父惣左衛門に仕ふ(博多小女郎被殺)

**こてふ** 將軍太郎良門同腹の妹なり。世を傾けんとし源頼光の下婢となり、頼信を戀ひて頼信の置たるべき詠歌短を頼手に筆田で出弄せしむ。頼信、頼平家督定の時、箕田織、小雛の色香に迷うて戯る。小雛乃ち頼信に他心なきを見せん爲、七首を抜いて襪の烏帽子懸袴を切つて座中不行跡の者ありと叫ぶ。頼信、伊染内侍と婚するや、小雛は内侍の養子蜘蛛を入れて毒殺せんとし、また良門に頼光の内情を密告せる際、頼光の御臺所に聞かれ

て斬付られ、保昌に殺さる。即ち惡靈となつて内侍を苦しめ、蜘蛛となつて千筋の糸を懸け、木幡等の侍女と争闘せしが名譽藤丸に眞甲を斬られ、運れて良門と共に葛城山に據りて保昌等に退治せらる(關八州勢馬)

**ことた** 近江小藤太。八幡三郎と共に工藤祐經の命を奉じ、赤澤山に隠れて河津三郎祐重を射殺す(本領曾我)

工藤祐經の命を奉じて河津祐重を赤澤山にて射殺したり。井原左衛門經景に陪從して相模寺に行き、井原兵衛の墓を掘りて、その隣りの祐重の石塔を取除かんとし曾我時致に縛せられ、耳鼻を殺がれて追拂はる(曾我扇八景)

建久四年五月富士の御狩の時、犬坊丸に従つて狩に出で、源經の聲を聞給め、虎少將を捕へて殺さんとせしが、是時富士の穴穴より暴れ出でたる野猪にかけられて疵を貰ひ、尋で曾我五郎時致に殺さる(曾我虎が磨)

二宮安清が富士野へ注進の早打の制限を誤らしめんとし藤澤寺に登り、寺僧を縛して鐘を撞き、禪師坊と格闘して共に轉び落ちたるを安清に刺殺す(曾我倉橋山)

**ことぢ** 琴柱。北白河の廣文の女なり。朋輩の横笛自刃する場に来り、同情の涙に暮れて共に死せんとす。横笛死に顔しながら之を制止す。横笛の父氏綱乃ち琴柱を養女となす(傾城酒吞童子)

**このはな** 女にして、薔花瓊瑤碎の妃となる(日本振袖袴)

けられ若君を奪はる。後に眞砂の前司勝海と夫婦となりて大和路なる郡山に茶店を出せしが、室津の遊女屋長に賣られ遊女となり官城野と名乗る。勝海の主井原國五郎豊舟來つて己に戀想するを憤怒し、豊舟を刺して自害せんと決せる際、勝海來つて小萩の舉動を咎む。小萩乃ち實を告ぐ。かくて夫に従ひ奈良興福寺南大門に行きて豊舟等と遇ふ(日本西王母)

**こはた** 「いはふぢの條を見よ。

**こはむね** 件健宗。院宣を讀んで須磨に下り、村雨の齧屋に泊り、在原行平を見付けて之を捕へしが、在原兼平がそれは行平にあらずといふを信じて放逐す(松風村雨東傳)

**こはる** 小春。大阪道頓堀區扇屋の湯女より曾根崎新地紀の國屋の遊女となり、美貌にして張もありしが、紙屋治兵衛と情死す。「ぢへま」の條を見よ(心中天網懸)

**こぶんご** 小文五。小餘段新左衛門尉景春の子なり。父が藤澤女御を殺害したる嫌疑によつて刑に處せらるるや、小文五は母を尋ねて羽倉伊賀介久國の宅を訪ひ、母に逢うて父の冤罪を歎く。久國これ聞いて感に堪へず、藤澤女御を殺したるは源頼光の廷に白したり。是に於て母子連立して源頼光の廷に行き、罪なき景春を死刑に處したるを責む。頼光乃ち景春を出して放逐するや、これは夢かとかかり喜び、感謝の涙に暮れて退出す。かくて後、光天皇が花山寺より還幸し給ふに還從す(弘徽殿鸚鵡産家)

**こゝい** 進藤小平。越後國守長尾藤虎の足輕なり。大津の船宿に來り、主君及び其從者兼用の數々の船を備ふ。甲斐國守武田信玄

の足輕横田兵介も来つて、船を備はんとすれど備ふべき船なし。是に於て兩人口論を始めたり。小平は後に信立に殺さる(信州川中島合戦)

こへゑ 綿屋小兵衛。大阪上町の口入業者なり。河内屋與兵衛に銀を貸し其返済を催促す(女殺袖地獄)

こへゑ 一ツ屋五兵衛。茶碗屋藤平次

の父なり。大阪松屋町九之助橋に住し陶器商を營む。「かへいじ」を見よ(生玉心中)

こまのしん 武知駒之進。惟任判官光秀の甥なり。光秀と共に反し、平朝臣香長の御臺所を圍み、御臺所の彈を切刺りしが、御臺所に斬付けられて斃る(本朝三國志)

こまん 小高。肥後熊本の子笹野三五兵衛と婚約ありしが、三五兵衛病死せりと聞いて國を出で、但馬城主の京都の邸に勤仕し、侍女の林を我夫の髮せざるものとは知る由もなかりしが、偶々川源五兵衛を挑みしことより引いて林の我夫たるを知るに至る。後に夫と共に源五兵衛を尋ねて薩摩に下る(薩摩歌)

こまん 小高。伊勢國鈴鹿郡開の宿白子屋左次内の出女にして、馬追伊達與作と感愛を通す。小高の父實光相納總分に遭ふや、小高これを救はんとし賢學を讀みて其貌を時番す。偶與作が馬方八藏と稱博して預け、八藏は與作の妻ある馬を奪はんとす。是に於て小高父を救ふ爲に時番したる銀を與へて八藏を去らしむ。馬追兄三吉、與作の爲に窃盜して發覺し、尋て八藏を殺して三吉死罪と定まるや、小高は父を思ひ三吉に同情して憂苦に堪へず、與作と共に死せんとし迷ひ出でし

が、しらべの姫及び其乳母波野に救はる(丹波與作)

こむつ 小陸。和膳内後(國性爺といふ)の妻なり。梅禮皇女肥前國平戸に遷居し、和膳内に逢うて話合ふ有様を見て嫉妬せしが、其皇女なるを知るに及んで心解け、夫より皇女を托せらる。後、皇女を伴ひて明國に渡る(國性爺合戦)

こよし 伊勢國鈴鹿郡開の宿白子屋左次の内

の出女にして、小萬の朋輩なり(丹波與作)

これたかしんわう 惟荷親王。清和天皇の異母兄なり。天皇と御位争に負けて比叡山麓小野に閑居せられしが、紀名虎が生前より謀反を勧められたるが、伴大納言宗前このことを思出されて招魂の法を修せらる。親王托鉢修行者に扮して大内に詣り、無理難題を書掛けて帝を追拂ひ、帝と稱せられしが相撲勝負によつて御位争に負け、暴行に及ばれんとしして桂馬園(民部俊綱)に留められ給ふ(丹筒兼平河内通)

これもち 上總介平朝臣惟茂。民部卿兼忠の嫡男なり。安和二年春禁中の變化を退治したる功によつて余吾將軍に任せられ、平國の寶劍及び宮女世繼御前を賜はる。然るに寶劍世繼御前入の際紛失せしかば、惟茂これを尋ねて信州戸隠山に入り、女人に逢らうて酒に酔ふやがてその女鬼形に化して消

失す。是時連の幽霊現はれて非業の死を遂げし概略を語り、帶刀廣房の一子房若の取立を懇請して劍の本地を述べ。惟茂その請を諾して寶劍を得たり。かくて後その寶劍を挿つて戸隠山の惡鬼を退治す(槍狩劍本地)

ころくろう 望月小六郎。望月六郎左衛門高貞の子にして狼の左京進盛光の家來なり。主人の娘春姫に従ひて北條殿なる鬪三の庵室に身を寄せし時、近藤兵衛守廣忠の兵に攻められて防戦し、春姫を助けて津の國路へ落延び、春姫と共に荻野の夕霧供養の廟に列し、夕霧の墓所に詣つ。後、奈良に行きて其主盛光等と石す(三世相)

こゑもん 石川五右衛門。江戸にて療法に兵法を學び、師と共に流寓して京都に來り、大橋詰鐘屋にて憲法の異母兄顯定の荷物

を掠奪せしを手にして遂に強盜の巨魁となる。吉野川に投身せんとする龍門家の姫君和

琴の前を勾引して大阪三軒屋町御手洗屋に賣り、部下を率ゐて御手洗屋に押入り、財物を奪うて捕吏に圍まらる。五右衛門數多の捕吏を殺し、憲法の子久吉を背負うて河内國道明寺まで逃延び、攝持の大釜中に溺置せしを捕へられて釜ながら京に送られ、七條河原にて釜煎の酷刑に處せらる。刑場に於て辭世の歌を詠んで曰く、石川や濱の真砂は盡くるとも世に盗人の種は盡きせじ。時に慶長十五年なり(傾城岡岡染)

こんざ 笹野權三。出雲藩主の表小姓を勤め美男なり。同輩川御伴之丞の妹と感動を通じ相會せる際伴之丞より、權三に對して競馬を挑む。偶若木忠太兵衛も來り、藩主の若殿祝言の悦によつて競馬行はるべきを語り、

茶漬指兩淺香市之進不在なるによつて眞の磁子の茶儀を權三及び伴之丞の兩人中に命す。然るに兩人とも未だ磁子の傳授を受けざるを以て、權三先づ市之進の宅を訪うてその妻おさみに逢ふ。おさみは權三の美貌を覺して行末己が娘のお菊と夫妻たしむべきを約し、其夜おさみは權三數寄屋に入り秘傳の巻を閲讀す。是時伴之丞もおさみをたらしめて秘傳を受けんとし、庭中に忍入つて様子を窺ふ足音に、今まで喧かりし蛙の聲はたと止む。權三座んで立ち、おさみを權三の立つを疑つて短話喧嘩となり、互に傳を奪つて庭に棄てる。是に於ておさみは權三不義ならぬと義となり、相携へて走り、山城國伏見町京橋の上にて市之進に女敵討に遇ふ(鐘權三)實話は享保二年七月十七日大阪府關橋上にて女敵討に遇ふ)

こんわうまる 澁谷金王丸。源義朝の臣なり。主君に従ひて尾張に落ち長田庄司致に寄る。義朝が瀆茶屋の警備に陪從して出で、義朝の浴衣を取りに行く(鏡田兵衛)義朝の墓に詣りて藤九郎盛長と邂逅し、互に異合しが相和し、長田庄司の兵と兵衛野に戦つて庄司を斬り常盤牛若の母を救ふ。後、土佐坊昌俊と改名し、鳥帽子折五郎大夫方にて六波羅勢と戦つて牛若を助ぐ、長田庄司の首を携へて姪小島に行き頼朝に謁す(源氏烏帽子折)

さいさう 片桐才藏。駿河守貞康の家士なり。貞康が今川了俊の遺骸を横領せんとしして反するや、才藏は了俊の嫡子仲秋を追撃し、三河國岡崎なる松葉川にて仲秋に殺さる(今川了俊)